



慶應義塾医学振興基金

2021



目次

ご挨拶	1
慶應義塾医学振興基金について	2
慶應医学賞	5
坂口光洋記念講座	8
組織・運営	



ご挨拶



慶應義塾長
長谷山 彰

慶應義塾医学振興基金は、本学医学部の卒業生である故・坂口光洋氏が浄財を寄附され、医学・生命科学の創造的発展への貢献と、国際的な人材の育成と交流を通じて、人類全体の福祉の向上をはかることを目的として創設されました。

坂口氏の医学に捧げる熱い想いを託された慶應義塾は、平成7(1995)年に慶應義塾医学振興基金を設け「慶應医学賞の授与」「医学国際交流事業」「医学研究奨励事業」「医学研究助成事業」および「坂口光洋記念講座」等の事業を通じて、医学研究の奨励と創造的発展に貢献するとともに、世界の医学の進歩に寄与するべく活動しています。これらの事業のうち、なかでも医学賞は医学・生命科学の領域における国際賞として国外・国内を問わず顕著かつ創造的な業績を挙げた研究者に対して表彰を行っており、国内の大学において他に類をみない顕彰制度となっています。

慶應義塾の創設者福澤諭吉は、若き日に蘭方医緒方洪庵の適塾で学び、大坂で流行したコレラの治療に努める恩師の影響もあって、医学教育に早くから関心を寄せていました。明治25(1892)年には、ドイツから帰国した北里柴三郎のために研究所の設立と経営を全面的に援助しています。北里は伝染病予防・細菌学に大きな業績を挙げるとともに、福澤の遺志を継いで慶應義塾の医学部創設にも心血を注ぎ多くの優れた医師・研究者を輩出してきました。

このような背景を持つ慶應義塾において、慶應義塾医学振興基金の事業を通じて国内外の多くの研究者が相互の交流を深め、医学・生命科学研究の命脈をさらに深く、広く耕し、人類全体の福祉の向上に貢献していくことを、また慶應医学賞が世界的な医学賞として着実にその根を拓いていくことを期待しています。ご関係の皆様方には、日頃のご支援、ご協力に深く感謝申し上げますとともに、引き続き温かいご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

2021年3月

慶應義塾 医学振興基金 について



慶應義塾は安政5年(1858年)幕末の激動期に新時代の先導者となった福澤諭吉によって創設されて以来、教育・研究の府として、また日本最古の私学として我が国の文化の発展と人材育成に大きな役割を果たしてきました。現在10学部14研究科を擁する我が国屈指の総合大学へと発展し、また、ここから研究者の国際交流も年々活発に行われるようになっていきます。

本塾医学部は、塾祖福澤諭吉の医学部設立の遺志を継いだ北里柴三郎を初代医学部長として1917年に医学科を創設、1920年に医学部を開設して以来、医学・生命科学の分野で幾多の優れた医師・研究者を輩出し、また教育・研究・診療を通じ広く社会に貢献してきました。

基金設置の経緯

1994年秋に医学部の卒業生である坂口光洋氏(1940年卒)から「義塾における医学研究の奨励と創造的発展に貢献するとともに、世界の医学の進歩に寄与する」ことを念願して浄財50億円が寄付されました。これを受けて慶應義塾は、『慶應義塾医学振興基金』を設置し、1995年4月1日より活動を開始いたしました。さらに、1999年7月には、20億円の追加寄付を得て、総額70億円をもとに基金事業を行っています。

目的

本基金は医学・生命科学の創造的発展に貢献するとともに、この分野における国際的な人材の育成と交流に寄与し、人類全体の福祉の向上をはかることを目標として設立しました。とりわけ日本の将来を担う若い研究者、とくに慶應義塾の研究者達が、福澤・北里両氏の精神の担い手として広く活躍し、国際的な医学研究・医療の発展と学問の交流に貢献することを目指しています。先人の努力によって築かれてきた義塾の声価が、将来においても高まることを期待いたします。

寄付者



さか ぐち みつ なだ
坂口 光洋氏
(1914-2003)

1914年10月1日生まれ。1940年慶應義塾大学医学部卒業。生理学教室・内科学教室・解剖学教室に勤務。1945年慶應義塾より医学博士を授かる。1948年より日本大学医学部解剖学教室にて研究・教育に従事。その後、整形外科医院を開業。2003年12月13日逝去。なお氏の父君は、アルギニン等のN-モノ置換グアニジン誘導体の鋭敏な検出反応である坂口反応(1925)を考案された坂口昌洋博士である。

慶應義塾の創設者

慶應義塾の創設者である福澤諭吉は、封建制度の終焉と開国を迎えた激動の時代を生きた思想家でした。西暦1853年のペリー来航は、18歳の福澤に外国に対する新鮮な興味を呼び起こしました。当時唯一外国人に開港されており、西洋の文化と科学の伝来の中心地であった長崎に赴いた福澤は、その後大坂に移り、西洋の諸制度と科学に関する新しい知識を得るために蘭学を学びます。そして1858年には江戸に移り慶應義塾を創立。福澤は、教壇に立つてから最初の10年間で、徳川幕府の外交使節団と共に米国へ二度、欧州諸国へ一度の渡航を果たします。視察中福澤は多くを学び、多くの書物を持ち帰り、短期間のうちに様々な西洋文化と知識を驚異的な速度で習得し、慶應義塾のみならず広く社会に還元しました。



福澤 諭吉
(1835-1901)

初代医学部長

慶應医学部は慶應義塾大学で4番目の学部として1917年に開設され、その初代学部長に就任したのが北里柴三郎です。北里は青年期に政府の研究員としてドイツに派遣され、ローベルト・コッホ博士のもとで研究に励み、細菌学の分野で世界的に認められるようになりました。1892年に帰国すると、日本政府は彼に公職を与えましたが、研究設備を用意することはありませんでした。これを知った福澤は、早速私財を投じて北里に研究室を提供します。それ以来北里は、慶應義塾大学に医学部設立を検討していた福澤を中心とする計画に加わり、日本の医学教育を率いることになりました。北里の門下から多くの優れた医学者が輩出され、この新しい学部はほどなくして医学・生命科学における日本の礎となったのです。



北里 柴三郎
(1852-1931)

事業

■ 慶應医学賞の授与

世界の医学・生命科学の領域において医学を中心とした諸科学の発展に寄与する顕著、かつ創造的な研究業績をあげた研究者を顕彰します。

■ 医学国際交流事業

慶應義塾大学医学部における学生の国際交流活動、海外協定校との国際交流活動、若手研究者の海外留学費用の補助を通して、医学の国際交流を促進します。

■ 医学研究奨励事業 (慶應医学賞 ライジング・スター賞の授与)

医学・生命科学の領域において顕著な業績を挙げている三四会員(慶應義塾大学医学部卒業生などにより構成される会の会員)等に対し研究奨励事業を行います。

■ 医学研究助成事業

慶應義塾大学医学部における各領域の研究を促進し、その振興を図るため研究助成事業を行います。

■ 坂口光洋記念講座

慶應義塾大学医学部および医学研究科に「坂口光洋記念講座」を設け、医学および生命科学関連分野における研究・教育を推進します。2012年2月にシステム医学講座を、2018年11月にオルガノイド医学講座を開設しました。



慶應医学賞



慶應医学賞メダル

目的

慶應医学賞は世界の医学・生命科学の領域において医学を中心とした諸科学の発展に寄与する顕著、かつ創造的な研究業績をあげた研究者を顕彰することにより、世界の医学・生命科学の発展に寄与し、ひいては人類の幸福に貢献することを目指します。

概要

本賞の受賞者には賞状とメダルおよび賞金が贈られます。授賞式は慶應義塾大学で行い、受賞者による受賞記念講演会等を開催いたします。

審査・選考

医学ならびに医学に密接に関連した生命科学の諸分野において優れた業績を挙げ、現在でも活発な研究活動を行っている研究者について審査を行います。

1. 国内外の多数の有識者より候補者を推薦していただきます。
2. 慶應医学賞審査委員会は推薦された候補者の研究業績等について審査し、数次の審査を経て授賞候補者を選定し、坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金運営委員会に推挙します。
3. 坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金運営委員会は最終授賞候補者を塾長に報告し、塾長はその報告に基づき、受賞者を決定します。

第26回 慶應医学賞審査委員一覧

委員長

塩見 春彦

慶應義塾大学医学部 教授

委員

審良 静男

大阪大学免疫学フロンティア研究センター 特任教授

有田 誠

慶應義塾大学薬学部 教授

岡野 栄之

慶應義塾大学医学研究科委員長・医学部 教授

久保田 義顕

慶應義塾大学医学部 教授

清水 孝雄

国立研究開発法人国立国際医療研究センター
脂質シグナリングプロジェクト長

高橋 淑子

京都大学大学院理学研究科生物科学専攻 教授

田中 啓二

公益財団法人東京都医学総合研究所 理事長

中原 仁

慶應義塾大学医学部 教授

永井 良三

自治医科大学 学長

野田 哲生

公益財団法人がん研究会 代表理事・常務理事 がん研究所 所長

本田 賢也

慶應義塾大学医学部 教授

柳沢 正史

筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構 (WPI-IIIS) 機構長・教授

アドバイザー

浅島 誠

帝京大学 先端総合研究機構 特任教授

井村 裕夫

京都大学 名誉教授

豊島 久真男

東京大学 名誉教授、大阪大学 名誉教授

垣生 園子

順天堂大学医学部 客員教授

御子柴 克彦

上海科技大学 教授、東邦大学理学部 特任教授

(50音順、敬称略)

慶應医学賞

第25回(2020年)受賞者



Aviv Regev (アヴィヴ・レゲフ), Ph.D.

Executive Vice President,
Genentech Research and Early Development

“Single Cell Analysis Technology to
Understand the Complexity of Life”

「シングルセル解析技術から
生命複雑系の理解へ」



宮脇 敦史, M.D., Ph.D.

国立研究開発法人理化学研究所チームリーダー

“Unveiling Life Science through
Innovative Molecular Imaging”

「革新的な分子イメージングの
開発による生命現象の解明」



過去の受賞者(1996年～2019年)

(*ノーベル生理学・医学賞受賞者、受賞年)

(**ノーベル化学賞受賞者、受賞年)

第1回(1996年)

Stanley B. Prusiner (*1997)

プリオンの発見とプリオン病の解明

中西 重忠

グルタミン酸受容体分子の構造と機能に関する研究

第2回(1997年)

Robert A. Weinberg

原がん遺伝子、がん抑制遺伝子とがん

谷口 維紹

サイトカインの構造と機能に関する分子生物学的研究

第3回(1998年)

Moses Judah Folkman

血管新生の分子生物学的研究

御子柴 克彦

哺乳類脳神経系の発生と分化の分子メカニズムの解析

第4回(1999年)

Elizabeth Helen Blackburn (*2009)

テロメアとテロメラーゼ

吉川 信也

ウシ心筋チトクロム酸化酵素の三次構造と反応機構

第5回(2000年)

Arnold J. Levine

腫瘍抑制遺伝子および重要な細胞内シグナル伝達分子としてのp53の解析

中村 祐輔

ゲノム解析に基づいたヒト諸疾患の病因遺伝子の解明

第6回(2001年)

Tony Hunter

Src チロシンキナーゼの発見と細胞増殖、癌化のメカニズムの解明

竹市 雅俊

カドヘリンの発見と細胞間接着機構の解明

第7回(2002年)

Barry J. Marshall (*2005)

Helicobacter pylori の分離培養と診断、治療法の確立

田中 紘一

生体肝移植の確立とその適応展開

第8回(2003年)

Ronald M. Evans

核内受容体を介したホルモン作用の分子基盤の解明

宮下 保司

認知記憶の脳メカニズム

第9回(2004年)

Roger Y. Tsien (**2008)

生きた細胞内のシグナル伝達の可視化と計測技術の開発

第10回(2005年)

藤吉 好則

極低温高分解能電子顕微鏡開発による膜蛋白質構造生物学の発展

第11回(2006年)

Thomas A. Steitz (**2009)

リボソームの構造解明及びそれに基づく次世代抗菌薬の開発

第12回(2007年)

Brian J. Druker

慢性骨髄性白血病に対する分子標的薬の開発

満屋 裕明

エイズ治療薬の開発

第13回(2008年)

Fred H. Gage

哺乳類の成体脳におけるニューロン新生の生理的役割の解明

坂口 志文

制御性T細胞の発見と免疫疾患における意義の解明

第14回(2009年)

Jeffrey M. Friedman

レプチンの発見とその生理作用の解明

寒川 賢治

グレリンを中心とする新規生理活性ペプチドの発見と臨床への応用

第15回(2010年)

Jules A. Hoffmann (*2011)

昆虫における自然免疫システムと Toll 受容体の発見

審良 静男

自然免疫システムにおける微生物認識と免疫応答機構の解明

第16回(2011年)

Philip A. Beachy

Hedgehog 遺伝子の発見とその機能解析および医学的応用

田中 啓二

蛋白質分解酵素複合体プロテアソームの発見と作動機構の解明

第17回(2012年)

Steven A. Rosenberg

効果的ながん免疫療法の開発

間野 博行

肺がん原因遺伝子EML4-ALKの発見と分子標的治療への貢献

第18回(2013年)

Victor R. Ambros

microRNA の発見とその作用機構に関する研究

長田 重一

細胞死の分子機構・生理作用の研究

第19回(2014年)

Karl Deisseroth

光遺伝学の実現と神経回路制御による脳機能解明

濱田 博司

左右軸を中心とした哺乳動物胚発生の分子制御機構

第20回(2015年)

Jeffrey I. Gordon

ヒト腸内細菌の病態生理的意義

大隅 良典 (*2016)

オートファジーの分子機構の解明

第21回(2016年)

Svante Pääbo

人類進化の分子遺伝学への貢献

本庶 佑 (*2018)

PD-1 分子の同定とPD-1 阻害がん免疫療法原理の確立

第22回(2017年)

John E. Dick

がん幹細胞の同定

小川 誠二

機能的MRI の開発

第23回(2018年)

Feng Zhang

哺乳類における CRISPR/Cas システムの開発と医学研究への応用

柳沢 正史

睡眠制御機構の解明と創薬への応用

第24回(2019年)

Hans C. Clevers

Wnt シグナルによる幹細胞と臓器形成制御

岸本 忠三

IL-6 の発見から医学への応用

坂口光洋 記念講座

医学および生命科学関連分野において、
社会的要請や諸条件の変化に迅速に対応した教育・研究を推進するため、
慶應義塾大学医学部および医学研究科に記念講座を設けました。

システム医学講座

教授 洪 実

システム医学講座は、2012年に医学振興基金の支援により
設立されました。本講座では、システム思考に基づく実験科学・
情報科学的アプローチの開発、医学応用を目指しています。具
体的には、遺伝子ネットワーク解析、コンピュータによる大量情報
解析などを技術的な軸とし、幹細胞の老化・若返り・分化制御機
構等の解明を通じて再生医学・医療研究を行っています。また
ゲノムや画像、臨床情報など全ての医療情報を統合したシステ
ム医学の確立と、その診断・治療への応用を目指しています。



オルガノイド医学講座

教授 佐藤 俊朗

2018年11月に医学振興基金の支援による新しい講座とし
て、オルガノイド医学講座が設立されました。オルガノイド技術
は、様々な組織幹細胞を永続的に増殖・分化させ、組織を擬似
した3次元構造体を作り出す技術です。ヒトの正常組織および疾
患組織から作られたオルガノイドは生体組織に近い生物学的機
能を保持し、疾患の発症機構の研究や再生医療応用などが期
待されます。私たちは、オルガノイド技術を多様な基礎医学・臨床
医学に応用し、オルガノイド医学の創生を目指します。



■ 基金

78億円(2021年3月現在)

■ 運営委員会

坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金運営委員会

■ 委員長

長谷山 彰 慶應義塾長

■ 委員

大石 裕	慶應義塾常任理事
竹内 勤	慶應義塾常任理事
高橋 郁夫	慶應義塾常任理事
天谷 雅行	慶應義塾大学医学部長(坂口光洋記念講座委員会委員長)
塩見 春彦	慶應義塾大学医学部教授(慶應医学賞委員長)
安井 正人	慶應義塾大学医学部教授(医学国際交流事業委員長)
柚崎 通介	慶應義塾大学医学部教授(医学研究奨励事業委員長)
金井 弥栄	慶應義塾大学医学部教授(医学研究助成事業委員長)
高野 仁	慶應義塾監局長
栗林 武郎	慶應義塾経理部長

(順不同)

■ 委員会

慶應医学賞委員会
医学国際交流事業委員会
医学研究奨励事業委員会
医学研究助成委員会
医学部坂口光洋記念講座委員会

■ 事務局

慶應義塾医学振興基金事務室
〒160-8582 東京都新宿区信濃町35番地 慶應義塾大学信濃町キャンパス内
TEL 03-5363-3609
FAX 03-5363-3215
E-mail k-msf@adst.keio.ac.jp
URL <https://www.ms-fund.keio.ac.jp/>

慶應義塾医学振興基金

KEIO UNIVERSITY
MEDICAL SCIENCE FUND

〒160-8582 東京都新宿区信濃町35番地 慶應義塾大学信濃町キャンパス内
TEL +81-3-5363-3609 FAX +81-3-5363-3215

E-mail k-msf@adst.keio.ac.jp U R L <https://www.ms-fund.keio.ac.jp/>

